

## 昭和10年代の保育の実際・子どもの様子の検証

— 現存写真を手掛かりに —

*A Study about Actual Practices in Kindergartens and Nursery Schools  
in Showa 10's Period*

— Using an Existence Photos —

豊田 和子 *Kazuko Toyoda*

(人間発達学部)

### はじめに

本稿は、平成29年度名古屋芸術大学特別研究助成を受けて実施した研究の報告である。すでに2018年3月1日付で同研究報告書「昭和10年代の幼稚園・保育所の実証的研究—現存写真による保育の実際・子どもの様子の検証—」(私家版)を作成し、すべての資料等はそれに掲載した。本稿では紙数の制約から、その一部を取り上げる。なお、本研究を着想した契機は、学術振興会科研費助成研究「終戦前後の幼児教育・保育に関する実証的研究」(C)15K043342、平成27～29年度、代表：清原みさ子)に、筆者は研究分担者として加わるなかで学んだことにある。同科研の調査研究の範囲では補いきれない時期として「昭和10年代」に焦点を絞ったが、結果として調査対象の園が重なっている部分もあることを記しておく。同科研では、「終戦前」の時期の範囲に関しては昭和15年以降を重点的に扱っているが、本研究では昭和10年代の前半期までを重点的に扱うように努めた。

### 問題意識

戦後70数年を経過した今日、わが国の保育・幼児教育は質量ともに大きく発展している。昭和22(1947)年の学校教育法・児童福祉法の制定により、幼稚園は学校教育機関として、保育所は児童福祉施設として位置づけられ、その後、保育内容や方法は時代的要請や社会的状況を反映して時の経過とともに変化発展している。

明治9(1876)年にわが国最初の幼稚園が創設されて以来、幼児教育・保育は、昭和期を迎えるころには質量ともに進展した。昭和の初期には、幼稚園教育は一部の階層の子どもの教育の場から一般家庭の子どもの教育の場へと広がり、貧民層家庭の子どもを多く受け入れていた託児所も慈善福祉的な性格から一般家庭の子どもの保育を担う場と拡大していった<sup>1)</sup>。大正末には幼稚園令の施行により保育内容等に関して国の基準が示され、質的確保の段階に入った。

戦後になって、幼稚園での教育は国民の教育の基礎段階を担うという位置づけがなされたことは制度的には重要な意味を持つものであるが、幼稚園などの教育現場や保育現場においては幼児期の教育に特有な保育内容や方法の構築は戦後に始まったものではなく、既

に昭和の初期から実践されていた保育内容や方法にその土台があると考え。大正15（1926）年4月に「幼稚園令」が發布され、幼稚園に関する単独勅令として保育内容の5項目が示された。これを受けて昭和初期から終戦前までは5項目の考え方が実践され、戦後もしばらくの間はこれが踏襲されていたところも少なくない。科研費助成研究「終戦前後の保育・幼児教育に関する実証的研究」（平成27～29年度）でもそのことは明らかにされた<sup>2)</sup>。戦後の民主化によって、全く新しいことが移入されたかのように思われるが、実際の幼児教育・保育の現場では、昭和10年代の保育が土台となっており、その上に新しい保育内容を受け入れ実践していったのではないかという仮説が成り立つ。

昭和10年代は、世界的な恐慌などによりわが国でも国民生活は経済不安や日中戦争が始まるなど通常ではない社会状況におかれ、幼児教育や保育もそのような世情に巻き込まれていく時期である。当時の保育が実際にはどのようなものであったかについては、まだ十分に解明されてはいない。この意味で、戦後の幼児教育・保育の刷新が何であったのかを考えるにあたって、昭和10年代の保育の実際を探ることは意味があると考え。

その端緒として、本研究では、幼稚園や保育所に現存している写真を手掛かりに実際の保育がどうであったかを明らかにすることを目的とする。研究方法としては、昭和10年代に存在していた幼稚園や保育所に出向いて現存している写真を収集して、そこから、当時の子どもの様子や保育内容等の実際を検証することとした。

## 1. 昭和初期の時代的背景と幼児教育・保育の特徴

### (1) 時代的背景と保育

大正期には新教育運動の影響を受けて児童中心保育や童心重視の教育が流行するが、昭和期に入ってから、どのように特徴づけられるであろうか。日本保育学会編著『日本幼児保育史』第4巻では、この時期を「昭和前期」と称して、「昭和元年から17年頃まで」というように区分している<sup>3)</sup>。この時期の社会状況については、「幼児保育の世界も」「国家の動きから無縁で」はなかった、として、次のように2つの面から時代をとらえている。「全体として」「国勢があがり、国家は興隆への道を歩みつづけた」状況として、昭和2年に上野と浅草の間に最初の地下鉄が開通、昭和3年最初の衆議院普通選挙の実施、アムステルダムオリンピックなどがあったことが挙げられている。

他方で、「明治20年頃から」の「国家主義が盛んになり、我が国は軍国主義の道をとることとなった<sup>4)</sup>」として、以下のような数々不穏な事件・事変を経て戦争に突入した時期であるとする。昭和3年の治安維持法改正、特別高等警察の新設、昭和6年の満州事変勃発、昭和7年の上海事件、五・一五事件の勃発、昭和11年の二・二六事件、昭和12年の日支事変の勃発、昭和16年の大東亜（太平洋）戦争開始、国民学校制度発足というように。

このような社会状況のもとで、昭和10年代になると幼稚園や託児所の保育目的も、「立派な兵隊や聖戦（戦争）に協力できる人を作ることに置かれ」「保健や体育に力が注が

れ]<sup>5)</sup>ていった。昭和の一桁の時期と10年代とでは、戦争色の浸透という点で大きな違いがみられる。昭和の一桁の時代は打ち続く世界恐慌による不況で国民全体が生活不安に見舞われる時期であるが、幼児教育の内容はまだ大正期ロマンの風潮が色濃く残っていたが、10年代に入ると明らかに国際状況の不穏が徐々に忍び寄ってくる。とはいうものの幼児教育や保育は、小学校（当時の国民学校）に比べると、その影響は薄い分野だった。

## (2) 幼稚園に関する法令等

昭和10年代の幼児教育の内容や方法に関して法的な影響力を持つのが、幼稚園令（大正15年）及びその施行規則である。それらの規則等によって、幼稚園の目的、入園年齢、運営や教員資格、保育内容、組編成、保姆の人数などが具体的に示され、その基本は昭和前期の幼稚園に浸透していくが、その要点を再確認の意味で概述すると以下の通りである。

幼稚園の目的は、「幼児ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フ」である。入園年齢は、3歳以上児だけでなく特別の事情ある場合は「満3歳未満ノ幼児」も認められた。運営・教員資格については、「園長」は「小学校ノ本科教員」、もしくは「保姆免許状」「教員免許状」を有するものと定められ、「保姆」は「女子にして保姆免許状」を有するものとされた。保育内容に関しては、従来の遊戯、唱歌、談話、手技の他に「観察」（「自然及人事に属スル観察」）が加わり、その他に適宜工夫の余地を残して「等」が入った。このことは中央集権的な教育行政を進めていた当時としては特記に値する。これらの事項は幼稚園令及びその施行規則に定められた内容であり、戦後の新制度の刷新まで続くことになる。本研究において、実際の写真によって検証したいことの大前提である。

次に、昭和前期に入って、新たに出された条令等にはどのようなものがあるのか、踏まえておきたい。列举すると、次のようなものがある。

- ・昭和4年 学校医、幼稚園医及青年訓練所医令（勅令）の施行  
幼稚園にも衛生面での職務に当たる園医が置かれることとなり、幼稚園の衛生法例が実現されたと言える。
- ・昭和6年 学校歯科医及幼稚園歯科医令（勅令）の施行  
これは義務ではなく、置くことができるという範囲。
- ・昭和13年10月 「国民学校、師範学校及幼稚園ニ関スル件」（教育審議会答申）  
この中で「幼稚園ニ関スル要綱」が示され、「国民育成ノ根基ヲ培フ意味ニ於イテ、就学前ニ於ケル幼児保育ノ改善ヲ図ルコトガ肝要デア」として、特に「家庭ヲ扶ケテ幼児教育ノ完キヲ期スルコトガ極メテ大切」とされた。
- ・昭和16年3月 国民学校令 公布

### (3) 託児所（保育所）に関連する事項

一方、貧民階層対象の慈善的な社会事業だった託児所の場合はどうか。昭和に入って災害や生活苦のため母親が労働に従事せざるをえなくなるなか、託児所の数は急増していくが、幼稚園と異なって託児所を法的に位置づける措置が取られていない。しかし、労働する母親に代わって乳幼児を保育するという「予防施設、経済的施設」の役割だけでなく、「精神教化」を重んじる「家庭教育全般」重視、幼児の「保健並に教育的要求」を充たすという役割を主張する声も出てくる<sup>6)</sup>。そして幼稚園と託児所の統一を求める声もあったが当時の政情から実現がかなわず、全国隣保保育事業並びに保育事業協会からは、独自の託児所に関する法令、保育所令を制定するよう要望したという<sup>7)</sup>。

実現には至らなかったが、昭和7年に「常設保育所施設標準」が保育事業研究委員会によって決定され、当時としては権威ある規定となった。その規定によると保育所の目的は「乳幼児を昼間保育し、其の心身の健全なる」発達を図ると共に「家庭員をして安んじて労務に従事せしめ、家庭生活の向上に資する」とされた。保姆の資格は「幼稚園保姆又は小学校本科正教員の免許状を有するものにして三ヶ月以上実地につき保育所に於ける乳幼児の保育に適する教習を受けたるもの」とされ、幼稚園保姆と同等の資格を要求している。保育要項は「生活訓練、性格教育其の他受託児童の心身の健全なる発達に必要な事項」とされた。

この限りでは、保育者は幼稚園教諭に匹敵する資格保有者であり、保育内容は幼稚園に準じて行われることがうたわれている。

## 2. 調査対象園

本研究で、訪問して資料収集できた保育所・幼稚園は以下のとおりである。

園名	所在地	設立（開設）年	調査訪問日
中之町幼稚園	東京都港区	明治23年	2016年8月17日
麻布幼稚園	東京都港区	昭和9年	2016年8月17日
藤幼稚園	北海道札幌市	昭和13年	2016年8月24日
親愛保育園	奈良市	昭和5年	2016年9月12日
信愛保育園	京都市	大正3年	2016年11月28日
庄原幼稚園	広島県庄原市	大正7年	2017年6月13日
月見幼稚園	広島県三原市	昭和12年	2017年6月14日
友愛幼稚園	栃木県足利市	明治35年	2017年8月2日
花園幼稚園	愛知県豊橋市	大正15年	2017年8月17日
うじな保育園	広島市	昭和4年	2017年8月22日
西条幼稚園	広島県東広島市	昭和6年	2017年8月23日
大津幼稚園	滋賀県大津市	大正5年	2017年10月27日
松阪仏教愛護園	三重県松阪市	大正13年	2018年1月29日
常盤幼稚園	三重県伊勢市	大正2年	2018年1月29日

以下では、紙幅の制約から収集したすべての園の写真を取り上げることはできないので、集合写真はなるべく少なくして保育や子どもの様子がわかるものを選んで掲載した。それ以外は特別研究報告書(私家版)に収録している。なお、一部の写真にはトリミングをかけている。

### 3. 保育の実際と子どもの様子（写真からの検証）

#### (1) 昭和初期（昭和10年以前：掲載の写真は年不詳）

##### ①行事の写真

当時主な行事として行われていた「運動会」「遊戯会」「クリスマス会」等の園行事の写真を集めた。西条幼稚園の運動会では、白いエプロン姿の園児たちが整列、直立不動の起立姿で写っている。松阪仏教愛護園では、着物に袴姿の保育者が園児の遊戯を誘導している。



西条幼稚園の運動会



松阪仏教愛護園の運動会



友愛幼稚園のクリスマス会



松阪仏教愛護園の遊戯会

クリスマス会や遊戯会では、キリスト教の園では聖劇を演じ、仏教の園では日本舞踊を演じている姿が写っている。

## ②その他

日常の保育の様子が窺える資料として松阪仏教愛護園では、低年齢の園児たちを着物姿の保育者が膝に乗せたり、室内大型遊具に複数の子どもたちが座ったりしている姿が写っている。天井にも旗などがぶら下がっている。西条幼稚園では、「ごちそうさまの後のひととき」というタイトルで、お揃いの白いエプロン姿の園児たちが食事の後のカップが乗っている机を挟んで座っている様子が写っている。後方にはごちそうの炊き出しに来たと思われる複数の親（母）たちが白割烹着で立っている。



松阪仏教愛護園、保育室



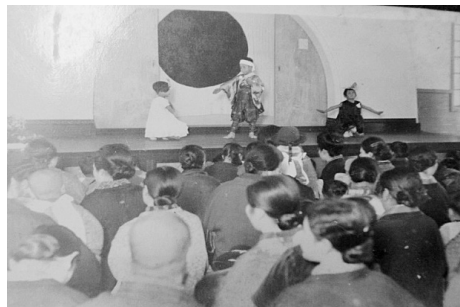
西条幼稚園「ごちそうさまの後のひととき」

## (2) 昭和10年

日常の子どもたちの姿として、砂場で遊んでいる様子が写っている写真があった。砂場の真ん中に大きなお山を作り、その頂上には日の丸の旗が立てられている。砂場の中に居る子どもたちは、みんなしゃがみこんで砂を扱っている。大半が腰下まである白いスモックのようなエプロンを身に着けている。もう一つは、大津幼稚園の遊戯会で、大きな桃の前で主役の桃太郎が羽織袴に鉢巻き姿で雄々しく立っている。左右の女兒は着物ではなく洋装である。会場には着物姿の保護者たちが大勢見に来ている。



うじな保育園、砂場遊び



大津幼稚園、遊戯会「ももたろう」

## (3) 昭和11年

### ①行事の写真

お遊戯会や運動会の行事の写真もいくつかの園から収集できた。

大津幼稚園の遊戯会では、白いエプロンをつけて立っている子3名と、エプロンではない服装でしゃがんでいる子3名が舞台の上で演じている。題目はわからない。松阪仏教愛護園の遊戯会では、中央の男児と4名の女児が演じている。2つの園とも、題目はわからないが着物姿の演じものではない。うじな保育園では、「子供会 魔法の箱」と記されていたが、正面の舞台幕には「コドモ會」という字が貼られて、左端の演者は保育者のようで、その前に大きな箱がセットされている。真ん中右寄りには、日の丸の扇子と「日本一」と書かれた幟旗のようなものが見える。着物姿の男児以外は、みんな白いエプロンを着けている。

また、松阪仏教愛護園には、大太鼓・小太鼓や笛などを持った子どもたちの写真があった。



大津幼稚園、遊戯会



松阪仏教愛護園、遊戯会



うじな保育園、「子供會 魔法の箱」



松阪仏教愛護園、楽器演奏

花園幼稚園には、運動会の行進をしている写真があった。園庭ではなく、どこかの広い公園か公共施設のような場所で、先頭を男性（園長か？）が長い棒を持って歩き、それに続いて大勢の園児たちが太鼓や鈴などの楽器を持って行進している。保育者らしき2人の女性は着物に黒袴姿である。園児の行進を見ている女性（母親）たちも着物姿のようであ

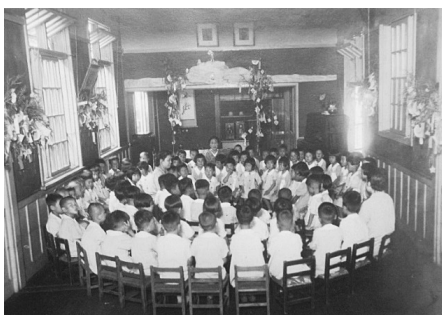


花園幼稚園の行進風景

る。園児の頭には帽子のようにも頭巾のようにも見える白っぽいものを被っている。

## ②その他の写真

中之町幼稚園には、室内で多数の園児が多重円形で座席している保育風景の写真があった。写っている保育者は3人で、中央の保育者が何やら話している様子である。「談話」の時間と推測できる。園児たちは全体的に白っぽい服装であるが、ブラウスカエプロンの制服かは判別できない。また、うじな保育園には、目の検査をしている写真があった。当時、衛生のため園医の配置が決められて、園医が園児たちの目の検査をしている場面である。



中之町幼稚園、保育風景



うじな保育園、目の検査

## (4) 昭和12年

信愛保育園には、アルバム帳の中に「ジャングルジム」と記された写真が複数あった。柱は木製で横棒は金属のようである。白いエプロン姿の園児たちが正面を向いて写っている。保育者は洋服姿で、小さい子を抱っこして写っているのが、乳児保育が行われていたことがわかる。また、常盤幼稚園には、屋内写真であるが、数名の園児たちが何かを演じている（遊戯）のを、その他の園児たちが椅子に座って見ている。園児たちは、スモックのような服を身に着けている。後方の男性も保育者らしい女性も洋服姿である。



信愛保育園、「ジャングルジム」



常盤幼稚園、室内で



その他には、卒園式の集合写真や雑壇の前での集合写真があった。常盤幼稚園の卒園式の写真には、襟にお洒落なデザインのワンピース姿の女児たちが写っている。男児も白い襟付き・ダブルボタンの上着を着ている。保育者は着物に羽織姿である。後方中央には園長であるアメリカ人宣教師がいる。また、中之町幼稚園の写真では、全員が白襟付きの黒っぽい制服で、前列の子達は正座両手揃えの恰好で写っている。小学校入学用の制服だろうか。



常盤幼稚園の卒園式



中之町幼稚園、雑壇の前で

(5) 昭和13年

信愛保育園には、乳児保育に関する写真が残されていた。左は「幼児寝室及サンルーム」と書かれた写真で、藤製の大きな乳児用のベッドが設置されている。もう1枚には、2人の保育者と数人の乳児が窓から顔を出している姿が写っている。保育者はエプロン姿である。



信愛保育園の寝室と乳児たちの姿

うじな保育園の「子供会」の写真に、日章旗と海軍旗が並んで掲げられ、その上に「祝漢口陥落」と書かれた舞台上、男児4人が帽子を被り敬礼をしている姿があった。昭和12年に日支事変が始まり、翌13年10月には漢口陥落の勝利を収めたのを祝って大勢の観客の前で兵隊さんを演じていると思われる。また、同園には同じ年頃（「13年頃」）に、「非理法権天」と書かれた幟旗が掲げられた舞台上、園児が武将楠木正成を奉納する劇の写真があった。正座している男児たちは、鉢巻きに鎧武者の姿である。



うじな保育園、子供会「漢口陥落」



同、「非理法権天」

### (6) 昭和14年

藤幼稚園には、外遊びを楽しんでいる子どもたちの様子がよくわかる写真が残されていた。木馬のような遊具に乗っていて園児も先生らしき男性も笑顔を見せている。もう1枚は、園庭で土管のような大きな円柱の上に3人の子どもが乗って笑っている。日常の保育の中での遊びの風景である。その一方で、5月27日海軍記念日を祝して「自己製作のカブト、ケンをつけて」と記された写真には、園庭でシスターの保育者の指導の下で、園児たちが円形になって剣と兜をもって立っている姿が写っている。

信愛保育園には、園庭で白エプロン姿の園児たちが二人一組になって遊んでいる写真があった。子どもも保育者も一緒になって楽しんでいる様子がうかがわれる。服装は洋装である。



藤幼稚園、外遊び



藤幼稚園、「自己製作のカブト、ケンをつけて」



信愛保育園、「ゆびきりげんまん」

(7) 昭和15年

麻布幼稚園には、園庭の滑り台や雲梯で遊んでいる園児たちの姿が写っている写真があった。アルバム帳に重ねて貼られていた「オイモホリ」の様子もあった。子どもたちが伸び伸びと遊んでいる姿や園外保育（観察）の芋ほりを楽しんでいる様子が収められている。

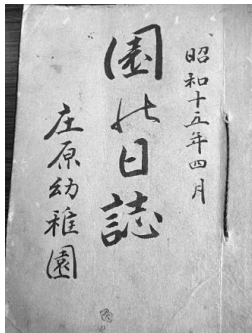
一方、子どもの写真ではないが庄原幼稚園の15年の園の日記には、4月3日の入園式に「君が代、勅語奉読、園長挨拶」に続いて、お土産に「オ菓子小鳥」を配布したとあった。



麻布幼稚園、「ミンナナカヨク オスベリ」



麻布幼稚園、「オイモホリ」



庄原幼稚園、「園ノ日誌」

(8) 昭和16年

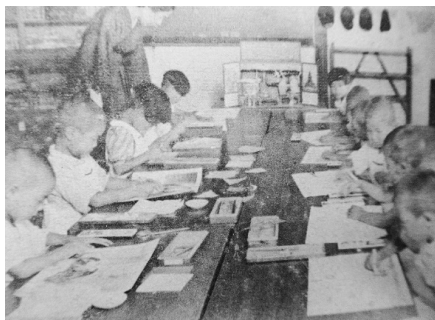
麻布幼稚園では、ひな祭り（ひな祭り）を祝って、皆で食事をしている様子の写真があった。ちらし寿司でも食べているのだろう。園児たちは長袖のスモックを着用している。



麻布幼稚園、「ヒナまつり」

(9) 昭和17年

花園幼稚園には、制作活動をしている保育の様子がわかる写真があった。おそらく「手技」の時間であろう、机を向かい合わせて園児たちはハサミやのりを使って大きな紙に貼り絵をしている。親愛幼稚園では、綴じ物の「卒園誌」に毎月の行事の写真があった。「五月」は、園舎の前での集合写真と親子遠足の写真が見られた。

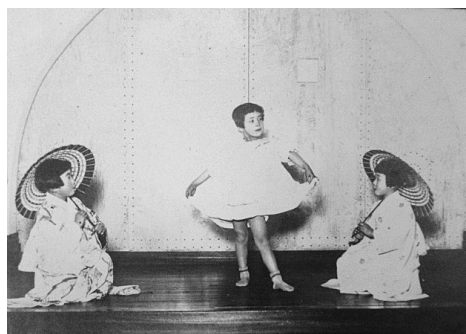


花園幼稚園、保育風景



親愛幼稚園、「卒園誌」より

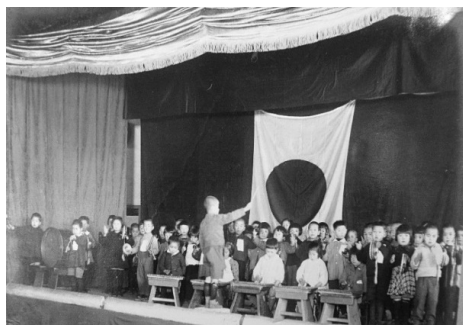
その他に、大津幼稚園の遊戯会の写真では女兒3人がドレスや着物を身に付けて踊っている様子が写っていた。また、麻布幼稚園では、神社の前で遥拝する園児たちの様子や日の丸旗の前で勇ましく楽隊をしている様子が写っている写真があった。戦時の保育である。



大津幼稚園、遊戯会



麻布幼稚園、「オマイリ」



麻布幼稚園、「ガクタイ」

## (10) 昭和18年

藤幼稚園には「2月」の卒園集合写真があった。前2列の子たちは幼いイエプロンを着けているので在園児であろう。3列目から後ろが卒園児と思われ、それぞれ手に白い証書を持って立っている。右端の女性は袴姿、左端にはシスターがいる。常盤幼稚園には、お雛様を囲んで写っている集合写真があった。



藤幼稚園、2月卒園



常盤幼稚園、ひなまつり

## 4. おわりに

年数が経過しているので現存の写真を探すのは困難であり、年月日が不詳のものもたくさんあった。今回収集できたこれらの写真には当時の子どもたちの表情や保育者の生の姿が写されており、文字による記録からはわからない実際を知ることができた。写真の多くは行事の場面であり、遊戯会や運動会、雛祭りなどである。10年代の後半になると、徐々に戦時色の反映がうかがえる写真も出てきた。しかし、中には、普段のままの子どもたちが遊ぶ様子や笑っている写真なども残されていた。数少ない写真からは、子どもたちの自然な園生活の日常や楽しい遊びの様子を知ることができる。

これらの写真と日誌などの記録を照合しながら、丁寧に保育の実際を見ていくことが課題でもある。最後に、写真提供にご協力くださった園に対して心から謝意を表したい。

## 注

- 1) 幼稚園の数は、昭和2年には1,182か所であったが、その後徐々に増えて、昭和12年には2,000に増加している。園児数も昭和の初めには10万人弱であったのが、昭和12年頃には15万人以上、16年には20万人以上となっている。一方、託児所数は、昭和1年に293か所、託児児童数約2万人だったが、昭和16年には1,718か所、児童数約15万人と増加した。(参照：日本保育学会編著、日本幼児保育史第4巻、フレーベル館、S.46年、pp.15-25)
- 2) 参照：清原みさ子研究代表（愛知学泉短期大学）「終戦前後の幼児教育・保育に関する実証的研究 課題番号15K04334 平成27～29年、基盤研究(C)研究成果報告書」平成30年3月（未公開）。
- 3) 日本保育学会編著、上掲書、p.9.
- 4) 同上書、pp.9-10.

5) 同上書、pp. 9-10.

6) 同上書、pp. 22-24.

7) 同上書、p. 26.

### 参考文献

文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに、S. 54年.